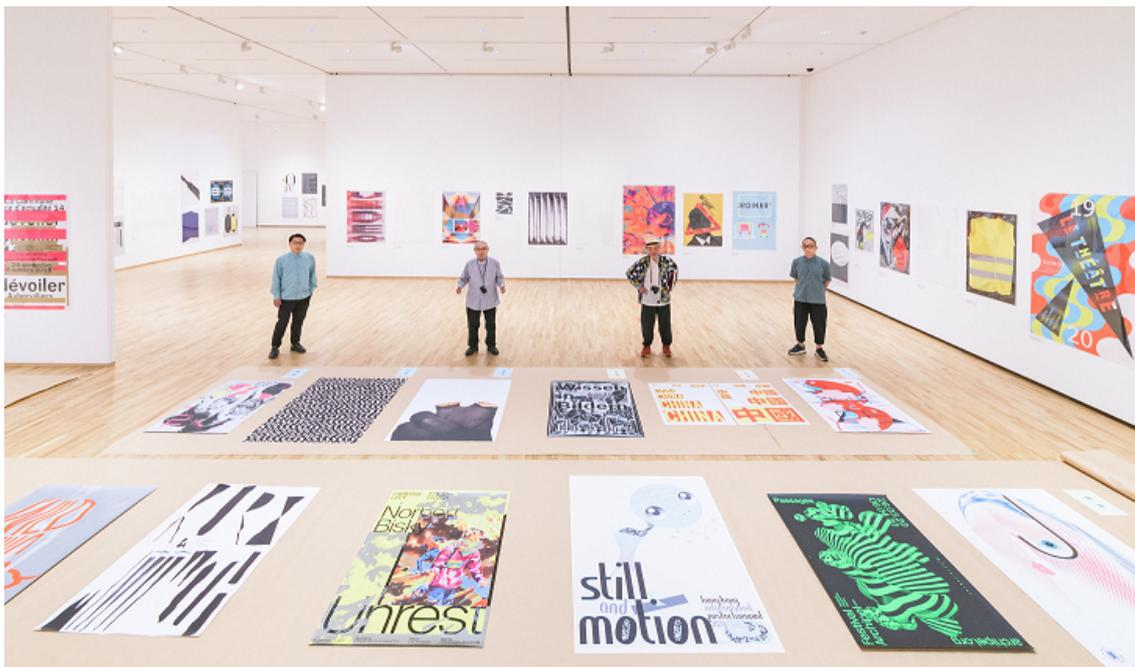


IPT2021 第二次審査（賞決定）講評



※2021年7月7日の第2次審査終了時に、第2次審査員の松永真氏、浅葉克己氏、佐藤卓氏、三木健氏による審査講評としての意見交換・聞き取りした内容を基に、富山県美術館がまとめました。

パンデミックという世界がこれまで対峙したことのない状況のなか、IPT2021を開催できたこと、64の国と地域からの5,943点もの応募に改めて驚くとともに、IPTの開催を続けてきた意義を感じる。そして、今回の入選作では「社会の状況を映し出すメディア」としてのポスターが強く見えたことも含め、IPT2021は間違いなく記憶に残る回となるだろう。

審査はA,B部門、U30+Studentの順で、賞を与えるにふさわしいと思う作品への投票と協議を重ねた。渡航制限で招聘が叶わず、海外審査員と意見を交わさなかったのは非常に残念だが、日本の審査員4人で納得いくまで議論を重ねて各賞を決定した。

グランプリは、マーティン・ヴォートリ（スイス）の《VIDEO EX 実験映画・フィルム・フェスティバル》。最初から目を引いたというよりも、賞候補を絞り込むなかで、活気のあるビジュアルが段々と気になりだしてきた。マンガの吹き出しのような形が飛び出し、その中にタイポグラフィが見え隠れする。独特の奥行と躍動感が、映像のフェスティバルを伝えるのにふさわしい。最大の魅力は、要素の多いビジュアルを無理にまとめようとはせず、自身がやってみたいと思った事に素直に向き合っていることだ。些

か未熟な部分があっても、世界中が深刻な状況下にある厄介な時代の中、新しさを見つけようとする姿勢がそれを凌ぐ。

グランプリに続く上位賞には、ポスターの歴史があるスイスと、勢いを増すアジア勢のなかから中国の作品が連なった。金賞のルー・ジュンイー（中国）《中国建国 70 周年記念》の「中国」「CHINA」とフォントの大きさだけを示すような数字だけの構成は、手法として新しいものではないが、それが情緒も饒舌さも排除した表現として見事に生かされた。何かの事実を直球で伝えるようなインパクトは、様々な解釈を促す力を持つ。同じく金賞、ラルフ・シュライフォォーゲル（スイス）の展覧会告知ポスターでは、規則に従って打たれたような無数の点が結ばれ、展覧会タイトルが浮かび上がる。タイポグラフィへの独自のアプローチには、力量を持ちながらも常に新鮮な表現を求めようとする姿勢が感じられた。

銀賞のファン・ヘ（中国）《勝利》は、文字を一切排除し、ビジュアルコミュニケーションに徹することで核心に迫った。Vサインの指を切り株にしたビジュアルは、見る者にも痛みを共有させる。どこかアイロニーを含んだ表現で、人と自然との勝利とは何か、犠牲とは何かを突き付ける強さがある。同じく銀賞のシュペールテラン（フランス）のポスターは、写真を用いた入選作の中で独自性が際立った。写真や情報としての文字など多様な要素を鮮やかな色彩を絡めてまとめている。そして、B 部門からの銀賞、上田 楠菜子《日本の女性 2021》は、テーマ「INVISIBLE(目には見えないもの)」を日本の社会での女性の見え方として捉えた点と、その着眼点を錯視的な表現と見事に融合させた点が際立った。

銅賞には、永く IPT に応募を続ける世代が、自身の表現をさらに革新していこうとする作品と、彼らに続く世代によるビジュアル・ランゲージとしてのポスター表現の大きな可能性を感じさせる作品を、良いバランスで選び出すことができたように思う。

また、紙媒体の B 部門と同じテーマ「INVISIBLE」での作品募集に 1,890 点もの応募があった U30+Student 部門は、入選作のレベルが高くなった。金賞の《盲目に叫ぶ》は、見えない何かを求める力強いイラストレーションが圧倒的に目をひいた。

審査を通じて思ったことは、ポスターには、視覚伝達のメディアとしての機能と、表現としての情緒があるということ。機能と情緒。この二つのどちらかが優勢ということではなく、それらの融合がバランスよく見えていたものが受賞につながり、ビジュアルにはわくわくするが、ポスターとしての機能が見え辛いものは入賞を逃したように思う。

会場に並んだポスター400点との対峙。ポーランドをはじめとするヨーロッパの応募者はポスターの歴史と伝統の先に新しいものを見出そうとし、成長めざましいアジアからの応募者はポスターの新しい地平を拓こうとしているのだろう。その様相のなかに、揺るぎないキャリアと実力があるデザイナーたちとともに、次世代を担う若手や学生がいることは、IPTの歩みが繋がりに続いていくことを示しているようだ。

そのようなポスターが集まったIPTの会場には、デジタルのモニターでは伝わらない圧倒的なパワーがみなぎり、初回からのやり方を崩さず紙媒体での応募を続けた意義を実感する。ここは、ビジュアルコミュニケーションの坩堝と呼ぶべきか、ポスターを逍遥する旅と呼ぶべきか。文化、言葉、表現の違いを超えた高揚感のあるIPTという場からは、「デザイナーたちがいかにしてこの時代を乗り越えようとしているか」が見えてきそうだ。